

馬場末遺跡土師器出土状態 (広田典夫氏提供)

な物を盛るものであるから、食料もしいに豊富になってきたのであろう。また前述小児を埋葬した壺棺もでた。心情も豊かになってきたものである。そのうちとくに「手づくね土器」といわれる祭器があった。これは弘岡中の後田でも発見されたのであって、岡本氏は川の神を祭ったものと推定され、馬場末でも近くを流れていた川の神を祭ったものであろうといわれる。馬場末は南に新川川、東に長谷川と川に近い。洪水も恐しいが、魚貝類も多く天恵でもある。もともと馬場末そのものが、以上の両川により挟まれた前述自然堤防である。西を町役場庁舎背後の丘陵台地によって保護され、洪水の際の土砂の堆積は、丘陵の末端を起点として進んだものである。そうした理由とは別に、太古の人びとは素直に川を怖れそして敬って神として祀ったことであらう。ところでこうして第五世紀頃ともなれば、大量の土師器によって代

これらの切畑が、原始農耕としてすでに縄文末期に日本で生れていたとするならば、このうえに米作りが加わったのであるが、また米作りと前後して畑作として伝わり、それが自然堤防のほか、東ナゴロのような緩傾斜の山地利用として、別の道を辿ったこともないとは云えてないであらう。たとえば弥生末期の高地集落との関係もある。いまは筆者にはこれ以上述べる力はないが、いずれにしても弥生時代約五百年間に、水田も畑作も発達したのであって、おそらくは少々の牛馬も伝えられ、これがつぎの時代への条件となっていく。以下古代にむかって進むことにしよう。

## 古代の春野

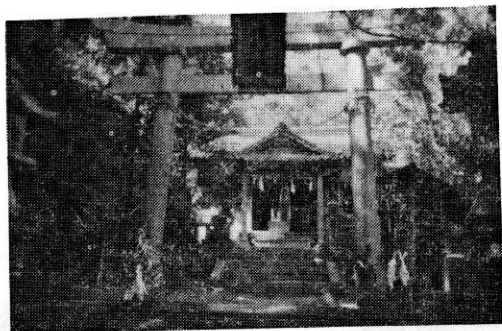
### 馬場末遺跡と吾川国造

**馬場末遺跡** 大陸文化の影響で急速に発達する日本は、いわば一種の疾風怒濤しゅうふうどとうの時代のように弥生時代進展を遂げ、紀元第一世紀北九州には、中国の後漢の光武帝より金印を授けられた奴国なこくが現われ、さらに第三世紀には有名な邪馬台国やまたいこくも出現し、ついに第四世紀には大和朝廷による日本統一の推進となるが、四国山脈により中央から隔絶した土佐では、そうした歴史は伝えられていないが、後述のように第五世紀頃には土佐国造も現われる。土佐国なりの統一が進んでくるが、春野についてこの点で注意されるのは、馬場末遺跡の発掘であって、その成果はまた山根遺跡に劣るものではない。すでに第三世紀のものと考えられる「ツボ棺」について述べ、時代とともに人の生活にも心情にも豊かさが加えられたとしたが、馬場末遺跡より出土した大量の土師器はじきが馬場末土器

これらの社の多くは平安末期―鎌倉期にかけて、熊野神社、八幡宮信仰の拡大を示す社名であるが、そのほか古墳時代大和朝廷の勢力拡大の時、また中央の神々を迎えているので、いまは、前記推理した在地の悠久の昔の氏神の姿を知ることができないが、いずれも、もとあった氏神に新たな神を迎え、そのため元の神々は消えたもの

地区名	社名	地区名	社名	地区名	社名
弘岡上	八幡社	芳原	王子権現社	東諸木	正八幡宮
同中	荒倉大明神社	内谷	天神宮	西諸木	若一王子社
西分	六條若宮八幡宮	仁ノ	八幡社	秋山	星神社
				甲殿	住吉四所大明神社
					森山八幡宮
					岐神社

さらに注意されることは、この低湿地のいきつめに岐神社(船戸)のあることである。この社が戦時中徴兵除け―動員連れとして、ひそかに参る人があったことは知られているが、これは旅行の安全を祈ることからの後世の付会である。お礼参りに、わらじを奉納するのも何かしら古めかしいが、この社と低湿地水田と銅鉾との三つを、ここで結び付けることはできないだろうか。すでに馬場末遺跡から川―水を祭る祭器が掘り出されたことについて述べたが、米作りと水は切っても切れない関係である。また農業がはじまれば土地の私有が進んでくる。土地の価値が上がるわけである。そしてあるものが土地を集めると、その子孫は恩恵を受け、土地を集め開いた先祖を神として祀ることになる。自然の水と先祖と土地を含んで一つの神が生まれてくる。氏神である。もともと原始の世は信仰心が厚い。すでに超越力を怖れ拜む習慣は成立している。その線上に氏神が生まれ、やがてもちろん産土神―集落の神となり、共同体の首領によって祀られながら共同体を統率していくことになる。いま春野町内の主な神社を表示すれば左表となる。



岐神社 (西畑)

表されるように、人びとの生活は向上し、生産は豊かになるのであって、自然堤防上に相当の集落は当然に生まれ、そこに村の生活が展開しなくてはならぬ。もちろんすでに山根遺跡の昔から、人びとは集まって村をなしたと思われるが、そうした村とはちがった村である。それは豪族を中心にした村、氏神を中心にした村であって、共同生活を行ないながら、それは身分差を持った人びとからなる村である。

神々の村 ここで、前に触れた西畑吹家の銅鉾についても一度考えてみよう。「春野町史」稿本の筆者も述べているように、豪族の家宝というのであって、考え方を換えれば祭器にもなる。いずれにしても銅鉾を持った人―家と、持たない人―家との違いは激しい。これが身分差というものである。ところでこの銅鉾を持った家が、どこにあったかを推定することはむづかしい。当時の集落跡ももちろん発見されていないからである。あるいは、銅鉾が単独で後になってよそから運ばれてきたと考えられないこともない。しかしここで、原始農業―低湿地稲作について考えてみれば、注意に値いすることがある。吹家には「長宗我部地検帳」のいう「江」があり、現在でもかなり地下水の高い低湿地水田が広がり、減反政策で放棄されていたのを見た。すでにこれらが稲作の最初行なわれたところであると考えたが、この付近には仁淀川の自然堤防があり、今は度々の洪水で集落は山の麓に移動しているが、地検帳の時代には、自然堤防の上が集落の中核であったことが、切図によってたしかめられる。人びとは自然堤防に住み、低湿地水田を耕すとともに、川や入江で魚を捕えたことであろう。

